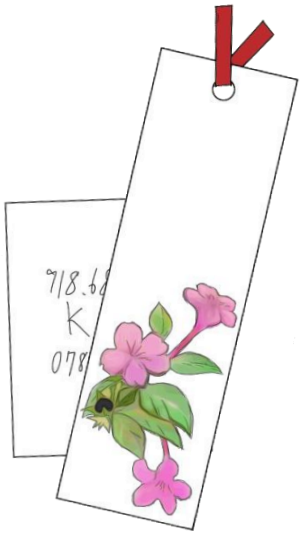
図書館ショートストーリー

栞と嘘の暗号　第一回

この物語はフィクションです。
登場する人物・名称等は架空であり、
現実のカウンター対応とは関係ありません。

「どうぞ。返却期限は6月1日です」
そう言ってカウンターの上に本と学生証を置いた。こういう声かけはまだ慣れなくて少し気恥ずかしい。カウンターの向こう側にいる学生は貸出手続きが終わった本をでかいリュックに詰め込んで、さっさと図書館の外に出て行った。
「ただいま。配架終わったよ」
「先輩、お疲れさまです」
振り向くと、先輩がブックトラックを押しながら帰ってきたところだった。
返却された本を本棚に戻すことを配架というらしい。そしてこの移動する本棚みたいな台車はブックトラックと呼ばれている。あれもこれも、四月にこのアルバイトを始めて、初めて知った言葉だ。
「あれ？先輩、まだ一冊残ってますよ」
分厚くて小難しいタイトルの本が一冊、ポツンとブックトラックに載っている。
「ああ、これは返本台にあったんだ」
「へんぽんだいって何でしたっけ？」
「ほら、あの参考図書のところにもあるだろ？戻す場所がわからなくなった本とかは、あそこに置くんだよ。んで、スタッフが回収して元の場所に戻すんだ」
言われてみれば、前にそんな説明を聞いた気がする。
「一応、貸出中になっていないか調べて」
「了解ッス」
たまに、間違えて自分が借りている本を返本台に置いてしまう人がいるらしい。それに気づかず本を書架に戻してしまうと、データ上はその人がその本を借りたままということになってしまう。
本に貼ってあるバーコードを読みとると、ディスプレイに本のタイトルが表示された。誰かが借りている本ではないようだ。
「一応、中身もチェックもしておいて」
「了解ッス」
紙を破かないように気をつけながら、パラパラとページをめくる。本棚に戻す前に、ページが破れていないか、汚れていないかってことも、チェックしなければいけない。それに、本にはいろいろな忘れ物が挟まっていることがある。貸出のときのレシートだとか、ノートの切れ端だとか、
「あ」
「どうした？」
「栞が挟まってたッス」
ピンクの花の絵が描かれた栞と、暗号のような数字のメモが挟まっていた。
「貸出履歴が無いのに、栞が挟まってたのか？」
「そうッス」
「じゃあ、落とし物のガラスケースに入れておくか」
図書館の中で拾った落とし物は、すべて階段脇にあるガラスケースに保管されている。自分が無くしたものがそのケースに入っていれば、カウンターに申し出て受け取ることができるのだ。
「このメモは捨ててもいいんですか？」
「どんな内容？」
「意味わかんない数字ッス」
「これ、請求記号じゃん。背ラベルの英数字」
「ああ、そうやって三段になってたらわかります」
図書館の本はすべて背ラベルの番号順に並んでいるのだ。
「これ、何の本だろ」
数字だけ示されると、なんとなく気になる。
「知らんけど、たぶん日本文学の全集だろうな」
「えっ。なんでわかるんですか？」
「ああ、この数字は本の分類……ジャンルを表してるから」
「へ～」
知らなかった。数字の意味なんて気にしたこと無かった。
「……この本、探してみていいですか？」
「この請求記号の本？別にいいけど、なんで？」
「なんとなくッス」
子どもの頃、クラスで「宝探しごっこ」が流行ったことがある。誰かが「宝」をどこかに隠してその場所を示す暗号を作り、みんなでその暗号を解読して「宝」を探す遊びだ。暗号を作るのも楽しいが、解き方を考えて「宝」を見つけた瞬間がもっと楽しかったのを覚えている。
「まぁ、いいけど。一応、配架場所を確認した方がいいよ。ほら、この八桁の数字がたぶん資料ＩＤだから、ＯＰＡＣでこの数字、検索してみて」
請求記号と資料ＩＤを使って調べると、メモにあった本は思ったよりあっさりと見つかった。確かに日本文学の全集だ。
そしてその本にも、花の栞が挟まっていた。

つづく